

熊本地震の現場から かかりつけ医に求められる役割

地域における連携が重要

今年4月、九州に甚大な被害をもたらした「熊本地震」。熊本県内の医療機関も被災する中、東日本大震災に続き日本医師会災害医療チーム（JMAAT）を被災地へ派遣し、医療支援に当たった。今回の災害時にも、JMAATとともに奮闘したのが地域に根ざった「かかりつけ医」たち。

本年1月、地域で献身的な医療活動に取り組む医師を顕彰する「日本医師会 第4回赤ひげ大賞」（主催：日本医師会、産経新聞社、特別協賛：ジャパンワクチン）を受賞した緒方健一医師（おがた小児科・内科医院理事長）に、かかりつけ医に求められる役割を聞いた。（谷田智恒）

第4回受賞者
おがた小児科・内科医院理事長
緒方健一氏



インタビューに応じる緒方健一医師。小児在宅医療と呼吸リハビリの普及に尽力し、超重症児とその家族を支えている
＝熊本市北区の「おがた小児科・内科医院」

4月14日に発生した「前震」のときは、医師会の会合で熊本市内のホテルにいた。タクシーが拾えず、バスで帰ったと記憶する。

翌15日は通常通り医院で診療に当たった。備え付け金庫や棚がしゃくしゃくして、カールも散乱してしまっていた。でも、数日要するだけに助かった。スタッフが被災していたこともあり、午後5時には診療を終えて自宅へ戻っていた。

16日の本震の際には自宅に就寝中だった。前震を上回る揺れに「イカン」と思った。逃げなければ、と車に荷物を押し込み、出ようとするも、電動シャッターが開かず逃げられなかった。30分ほどで停電も復旧したので、とにかく医院の駐車場へ向かった。そこから、訪問診療で関わっている患者たちに電話をかけて続けた。人工呼吸器が必要な患者は風水害時、電源確保を目的に避難する病院があらかじめ決まっていたが、今回の場合は多くの病院も被災した。

14日の会合で話をしていた、近くの熊本機能病院理事長を思い出して、連絡すると受け入れてくれた。

最初は機能病院の検査室へ避難させてもらったが、同病室も負傷者や被災者であふれかえっていた。機能病院は「理事長の部屋をどうぞ」とまで言ってくれたが、自宅へ戻る状態だったので、数日帰った。地域の総合病院とかがかりつけ医の連携の重要性も感じた。

シガソケットで車とつながってしまっていた。スマホから、安否や所在確認の電話をかけ続け、呼吸リハビリや

一極集中は危険、広域的な対応必要



緒方健一医師が地道に続ける在宅患者への訪問診療活動。熊本地震後の対応で患者とかかりつけ医の絆は強まった
＝熊本県合志市

各地の医療環境整備に期待

献身的に住民支える活躍

赤ひげ賞

日本医師会会長
横倉義武氏



日本医師会では、かかりつけ医をもつことをお勧めしています。同じ医師のものを継続的に受診することにより信頼関係が生まれ、健康に関することを何でも気軽に相談できるようになります。医師として、も家族や生活の状況も踏まえ、より親身な治療・アドバイスがしやすくなるメリットがあります。

今回の熊本地震の際には、多くの地元医師が、自身も被災しているにもかかわらず、

ジャパンワクチン社長
寺野伸一氏



赤ひげ大賞は今回で第5回という節目を迎えますが、ジャパンワクチンは地域の医療現場で長年にわたる日本各地それぞれの地域で、献身的に住民の皆さんを支えてこられたかかりつけ医の先生方の活躍を顕彰する本趣旨に賛同し第1回から協賛をさせていただいてまいりました。これまで20人の先生方が顕彰されていますが、被災地の一日も早い復興をお祈りしています。

日本医師会 赤ひげ大賞
【主催】日本医師会、産経新聞社
【後援】厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ
【特別協賛】ジャパンワクチン株式会社

日本医師会 赤ひげ大賞HP
http://www.akahige-taishou.jp/

あなたのかかりつけの先生への
メッセージを募集します!

1000円分
プレゼント

地域で活躍されている全国の赤ひげ先生（かかりつけ医）への応援メッセージを募集します（300字以内）。あなたのかかりつけの先生方への思いを、お寄せください。ご応募いただいた中から事務局で選定したメッセージを公式ホームページに掲載します。メッセージが掲載された方には、QUOカード（1000円分）を進呈します。

- 個人情報公開範囲
メッセージ公開の際には、応募者の「名前」または「ペンネーム」などを掲載させていただきます。※「ペンネーム」に入力があった場合はにそちらを掲載します。
- 応募期間
2016年12月31日まで
- 発表
赤ひげ大賞公式ホームページに掲載
- 応募先
【郵送】産経新聞社「赤ひげ大賞」事務局 千100-8079
東京都千代田区大手町1の7の2
【公式ホームページ】
http://www.akahige-taishou.jp/

スマートフォンの方はこちらから→

医師との「絆」に助けられた

熊本地震では、重度障害を持つ患者らが厳しい避難生活を強いられました。生活に医療機器が欠かせず、一般の体育館への避難は難しい上、地震の被害で受け入れられる病床も限られる。そうした中で、緒方医師に物心両面から支えられた患者と家族は、かかりつけ医の大切さを再認識した。

熊本市北区の熊本県立黒石原支援学校高等部3年、西留光波さん（17）は全身の運動機能が失われた難病の脊髄性筋萎縮症を患い、生後7カ月から人工呼吸器を使用、寝たきり生活を送る。一戸建てオール電化の自宅は、地震による被害はなかったが、水道が断水したため、かかりつけ医の緒方医師を頼った。

母、まなみさん（50）によると、光波さんの場合、介護用オムツ一つを取っても、大人用でも子供用でもない特殊サイズという難しさがあるが、緒方医師を通じ鹿児島島の医療機関から届けてもらうことができたという。

まなみさんは「娘と（熊本機能病院へ）避難中も、緒方医師のスタッフから、私の分のお弁当まで用意して持ってきてくれたし、自宅へ戻った後も水を運んでくれた。緒方先生とつながっていることで随分助けられました」と振り返る。

難病の副腎白質ジストロフィーを患い、8年前に気管切開して人工呼吸器が離せない熊本県合志市の村山良貴さん（36）も、緒方医師が在宅主治医を務める。地震で自宅は一部損壊の被害を受け、同市内の国立病院機構熊本再春荘病院に4月末まで入院した。

母の智子さん（60）によると、村山さんも、あらかじめ決めていた熊本市内の病院が被災して受け入れがでなくなっていたため、緒方医師が受け入れ先の調整に協力してくれたという。智子さんは「緒方先生も、たくさん患者を抱えており、振り分けも大変だったと思う。わが家は先生の言った通りに動き、先生の判断に助けられて安心して避難することができた。16年、息子が世話になっているが、この関係がなかったら、私たちは一体どうなっていたのか」と話す。かつてない大災害を通じ、かかりつけ医と患者の絆は強まった。

力をあわせて、未来を守る

ワクチンによる予防こそが、これからの医療の中核になる。
ましてや感染症の予防は、ひとりを守るだけでなく、
その周辺の人々、ひいては社会や、この国そのものを守ることになる。
そう信じる私たちは、新しい時代に向かって、力強く歩み続けていきます。

